

■新車販売市場はコロナに翻弄されるが

中国の新車販売市場は新型コロナウイルスの影響をまろに受け、2020年の趨勢はなかなか読みづらい。ざっくり前年同期との比較で言えば、1月は18%減、2月は80%減、1-2月だと45%減となっており、1-3月も4割以上の減少が見込まれている。4-5月にならないと回復基調に乗らない、との見方が優勢で、2020年1-6月の半年は25%減程度で着地する、ともされる。

これらの傾向は新エネルギー車(NEV)でも共通しているか、あるいはもっと深刻な状況になりそうだ。中国ではNEV購入における補助金が2020年で打ち切られることが決まっており、すでに現在の補助金水準は往時の半分以上以下となっていて、価格に魅力がなくなってきている、ということも大きい。

つまり、2019年までにすでに経営状況が深刻な、中国資本の弱小メーカーや、何百社あるか分からない、とされる、中国新興NEVメーカーもかなりの数、淘汰が進むと考えられる。市場の健全化のためにはその方がよく、さらに大きいのは、中国において引き続き良好なブランドイメージを有する日系各社にとっては、市場が縮小しても実はシェアを伸ばせるチャンスではある、と言える。

そんなこんなで、新型コロナウイルスに翻弄される中国自動車業界ではあるが、ウイルスまん延により、中国でも逆に注目を集めるようになったのが、自動運転による無人走行技術だ。要は人と人の接触が問題なのであって、人と接触せずに、様々なニーズがかなえられる、その可能性がある次世代技術、ということだ。

■中国における最新の自動運転業界の動き

もともと中国には、中国版Google「バイドゥ」が展開する自動運転プラットフォーム「Apollo(アポロ)」があり、それに日系各社も参画するなどの動きが伝えられる他、それとは関係なくとも、自動運転に関する取り組みは非常に多かった。日本ではあまり考えられないが、自動運転バスを特定の地域で試乗する、ということも決して難しいことではなく、事実、筆者も中国各地で様々な中国の自動運転バス、あるいは自動運転タクシーに試乗してきた。

そのため、今回はウイルスまん延が起爆剤になった、というのが正しい。新型コロナウイルスで活躍する中国の自動運転車両をいくつか実例で上げてみよう。

- ・大手ECの京東(JD.COM)による、将来的には無人配送を視野に入れた小型無人車
- ・大手デリバリーの美团(Meituan)による、無人宅配を視野に入れた小型無人車
- ・新興の馭勢科技(UISEE)による、工場内や空港などの運搬業務の無人化のための車両
- ・新興の白犀牛(WHITE RHINO)による、武漢の病院内の物資配達用の小型無人車
- ・新興の智行者(IDRIVERPLUS)による、本来は無人清掃車だが、今は消毒車にも
- ・新興の新石器(NEOLIX)による、日本のコンビニ店舗並みの販売力ある無人小型販売車